第3種郵便物認可

夕刊 3/10(木) 朝日 (6)

食べることは かかわること 京都でシンポ

摂食障害 現代社会に警鐘

食堂が結ぶ「胃袋の連帯」

「食」をめぐって活発な議論が展開された＝京都市左京区

「かかわり」という視点から「食」の問題に迫るシンポジウムが2月、京都大人文科学研究所（京都市左京区）で開かれた。独創的な食研究を進める2人の研究者が報告。活発な議論が展開された。

1人は磯野真穂・国際医療福祉大大学院講師（文化人類学）。拒食症、過食症など「摂食障害」となった女性6人に4年で100時間を超すインタビューをし、「摂食障害」を文化人類学の視点で考察した著書「なぜふつうに食べられないのか」（春秋社）を昨年出した。

磯野さんによれば、「同じ釜の飯を食う」と言うように、人は他者と同じものを食べることで他者との「紐帯（結びつき）」を作り出すという。「食べることの本質は人と人との具体的なつながりの中に存在する」と説く。

だが、磯野さんが調査した摂食障害の女性は、他者と一緒に食べることが困難になった。体重やカロリーが気になり、人との会食でどのくらいの食べ物を口に入れ、いつ飲んだらいいかが分からなくなったという。

「では摂食障害になった人は特別なのか。そうではない。現代人は体脂肪率、体重など身体にかかわる様々な数値で評価されている」。自分のそのままの身体を受け入れることを許さなくなっている現代社会に警鐘を鳴らした。

もう1人は湯澤規子・筑波大准教授（歴史地理学）。近代日本社会を「胃袋」から考察し、近く著書「胃袋の近代―食と人びとの日常史」（共和国）を出す予定だ。

大正時代などに愛知県・尾西地域の織物工場で働いた女性労働者の調査をする中で、彼女たちが日々何を食べていたのかに着目。「工場の炊事場や食堂は労務管理の一環というだけでなく、『食』を通した胃袋の連帯、生活の再編事業と言えるのではないか」と述べた。

近代化が進む中で農村から都市への人口移動が起こり、「胃袋は工場、軍隊、学校、公営食堂、一膳飯屋などに集まっていった」。工場に炊事場や食堂を設けた経営者の中には労働者のニーズに応え、保育所を設立するなど社会事業を始めた人も目立つという。「胃袋は民営や公営の食堂や工場の食堂などで誰かに気遣われ、『かかわり』を持たれることで、社会につながる一つの経路となった」と指摘した。

食をめぐる思想を研究する藤原辰史・京大人文研准教授（農業思想史）は「学生に今まで食べてきた中で一番おいしかったものはと尋ねると、実家に帰省した時の母のみそ汁だったり、恋人と初めて一緒に食べたラーメンだったりする。そんな物語の中に最高のごはんはあり、それは人との『かかわり』の中でしか食べられない」と指摘。「かかわり」から「食」や現代社会の問題を考えてゆく大切さを強調した。

（大村治郎）